

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第138集

朝 日 遺 跡 VII

(第1分冊 遺構)

2007

財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

序

遙か昔、二千年程前の愛知県に大いに栄えた集落がありました。この集落、朝日遺跡は弥生時代の日本における東西文化のクロスロードとして、また大陸文化の終着地として存在した遺跡であることを疑う人はいないでしょう。現在では、清須市と西春日井郡春日町、名古屋市西区にまたがる境界部分に位置しますが、東名阪自動車道、国道 22 号線、国道 302 号線、そして近年建設された名古屋高速道路 16 号一宮線と交通の要地として景観を一新してきました。今回の朝日遺跡の発掘調査は、この名古屋高速道路 16 号一宮線建設に先立って行われました。その結果、弥生時代の堀といえる環濠、墓、おびただしく重複する住居や柱穴など弥生時代の人々の営みの痕跡が明らかにされました。出土した遺物においても、全国でも希少な巴形銅器、大陸から伝来したキ龍文鏡を用いたペンダント、鍛造された有肩袋状鉄斧をはじめとする多種多彩で多量の遺物がみつかりました。本報告書は、過去の調査地とも重複する 87 カ所にも及ぶ地点の調査成果であり、そこから出土した膨大な遺物の分析成果であります。また愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、清洲町教育委員会、愛知県埋蔵文化財センターによるこれまでの朝日遺跡に関する調査成果をできるだけ加味して示しましたが、不十分な点や、取り上げることができなかった問題も多くあります。今後、これらの調査資料が地域の貴重な財産としてさらに活用され、日本全国の弥生時代研究の礎になることを切に願うものであります。

最後に、調査を行うにあたりご理解をいただき、ご指導・ご協力をいただいた日本道路公団、名古屋高速道路公団、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、清須市教育委員会、春日町教育委員会、および地元住民の方々、その他にもご協力を賜った多くの皆様に対し、心より謝意を申し上げます。

平成 19 年 3 月

財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長 林 良三

例 言

1. 本書は愛知県清須市（平成 17 年 7 月 7 日に旧西春日井郡清洲町・新川町・枇杷島町が合併）と西春日井郡春日町、名古屋市西区の 2 市 1 町にまたがって所在する朝日遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は平成 10 年 12 月から平成 16 年 3 月にわたって実施した日本道路公団東名古屋工事事務所による近畿自動車道名古屋関線清洲 JCT 建設に伴う事前調査（調査面積は 5367 m²）と名古屋高速道路公社による県道高速清洲一宮線建設に伴う事前調査（調査面積は 5665 m²）の発掘調査報告書である。
3. 発掘調査を担当した者は以下の通りである。

平成 10 年度 服部信博（主査・現愛知県立一宮興道高等学校教諭）、春日井毅（調査研究員・現一宮市立宮西小学校教諭）、飴谷一（調査研究員・現愛知県立江南高等学校教諭）、蔭山誠一（調査研究員）

平成 11 年度 赤塚次郎（主査）、鈴木正貴（調査研究員）、蔭山誠一

平成 13 年度 赤塚次郎、樋上昇（調査研究員）、皆見秀久（調査研究員・現愛知県立安城南高等学校教諭）、蔭山誠一

平成 14 年度 赤塚次郎、鈴木正貴、樋上昇、蔭山誠一

平成 15 年度 石黒立人（主査）、池本正明（調査研究員）、蔭山誠一

また、調査（発掘調査・測量に関する作業）に参加して頂いた方々は、以下の通りである（五十音順・敬称略）。

安達亜紀子、安藤慶子、池田アヤコ、池田勲、池田秀子、石井里英、石田優子、伊藤正三、伊藤穂澄、猪子とし子、今田清美、岩室一榮、岩本三季子、上田誠人、鶴飼京子、枝木幸雄、太田哲子、片山博道、加藤豊子、門丹生敏裕、川口ひさ子、川口洋次郎、黒谷日佐子、後藤純子、虎伏俊三、近藤洋子、斎藤めぐみ、佐々孝、桜井哲司、櫻井毅、笹野千代子、澤田洋子、繁野なつ子、柴山香代子、新海澄子、杉田千代子、杉本たみゑ、関美男、関根伸悟、祖父江節子、高鷺良治、武田一三男、丹下昌之、辻弘和、土任隆、寺沢なつ江、長井輝彦、中野絹枝、中村一誉、中村友己、中屋玲子、西尾孝行、西川秀和、西保、羽田野明美、服部澄枝、服部富子、華井京子、華井孝子、林眞美、坂野俊哉、久田友子、福田麦、藤岡憲一、星野賢一、前波忍、増川祐子、町田義哉、松永蓉子、水野良子、森本隆寛、安延義昭、山内富正、山内英美枝、山之内なつ子、山本眞紀子、渡邊智

4. 発掘調査・報告書作成に際して次の機関からご指導・ご協力を得た。

愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、日本道路公団東名古屋工事事務所、名古屋高速道路公社、清須市教育委員会（旧西春日井郡清洲町、新川町）、西春日井郡春日町教育委員会、名古屋市教育委員会文化財保護課、名古屋市見晴台考古学資料館、国際航業株式会社、パスコ株式会社

5. 発掘調査・報告書作成にあたっては次の方々のご教示、ご協力を頂いた。記して感謝の意としたい。
赤澤徳明、天本洋一、安藤広道、岩永哲夫、伊藤淳史、伊藤厚史、伊藤正人、伊藤秋男、伊庭功、今塩屋毅行、植田弥生、上村安生、ウェルナー・シュタインハウス、大庭重信、大野義人、大橋吉

彦、岡村秀典、岡村秀雄、岡田賢、岡本淳一郎、織田銑一、小野倫良、及川良彦、加島次郎、仮屋威、川北秀実、木下尚子、菊池芳郎、木野本和之、金姓旭、木村勇作、小玉章則、忽那敬三、小山浩和、小林正史、近藤大典、後藤直、後藤理加、齋藤由美子、笹澤正史、佐藤由紀夫、佐々木憲一、篠原和大、柴垣哲彦、下條信行、菅付和樹、杉山仁、鈴木元、鈴木弘子、鈴木三男、鈴木一有、清家章、高木宏和、高木芳史、高田健一、高橋敦、高橋章司、高橋浩二、田崎博之、田中一廣、谷口武範、谷口肇、茅野嘉雄、土任隆、出原恵三、寺前直人、中川律子、長津宗重、中村和美、中村豊、中村真理、長友朋子、中山俊道、中山誠二、成田誠治、瀬川田佳男、野口哲也、野村充和、能城修一、橋本達也、朴天秀、華井京子、馬場伸一郎、濱田竜彦、林大智、原田幹、坂野俊哉、久田正弘、七田忠昭、廣瀬雄一、深澤芳樹、福永伸哉、福見貴子、藤波啓容、北條献示、北條芳隆、保坂和博、穂積裕昌、正岡大実、町田義哉、溝口勝、三吉秀充、村上恭通、村上由美子、村木誠、森岡秀人、八賀晋、安英樹、安中哲徳、山口誠治、山崎健、山田昌久、山中章、吉田広、吉村和昭、依田亮一、若林邦彦、和氣清章、渡邊裕之、渡辺誠（五十音順・敬称略）

6. 平成報告書作成に関わる整理作業には、蔭山誠一があたり、神谷已佳（調査研究補助員）、河合明美（調査研究補助員）、平野昌子（調査研究補助員）、水野多栄（調査研究補助員）、飯嶋渉（整理補助員）、石原浩子（整理補助員）、中野恵子（整理補助員）、滝智美（整理補助員）、山田琴美（整理補助員）、板倉洋子（事務作業員）、粕谷和美（事務作業員）、河村圭子（事務作業員）、安藤慶子（以下整理作業員）、石黒美佐子、伊藤穂澄、今田清美、岩田明美、岩室一栄、岩本三季子、上田美智子、牛田長子、大竹とし子、岡田賢、荻須和美、奥田美由岐、神谷信子、黒谷日佐子、小崎暢子、後藤純子、近藤洋子、櫻井信子、笹野千代子、佐藤ヤエ子、柴山香代子、新海澄子、杉田千代子、高木英子、塚本ひろみ、仲川信子、中野絹枝、羽田野明美、服部三枝子、東野由貴子、日下部祥子、鷺田万里、松井姫恵、松田典子、水野たつゑ、水口房江、山川和子、山崎健、山之内なつ子、吉田洋子（五十音順・敬称略）

遺構の発掘調査・測量、出土遺物の整理等において、アイシン精機株式会社、愛知産業株式会社、国際航業株式会社、株式会社アルカ考古学研究所、株式会社 B.G.、佐伯工業株式会社、セビアス株式会社、中日本航空株式会社、パスコ株式会社等（五十音順・敬称略）の諸機関のご協力を得た。

7. 写真図版の撮影について、遺構は国際航業株式会社と佐伯工業株式会社、遺物はスタジオ遊金子知久に委託して撮影して頂いた。

8. 本書の編集は赤塚次郎の指導のもと、蔭山誠一が担当した。本書の執筆は目次と各章の文頭に記載している。

9. 本書で使用している遺構略記号は以下の通りである。

SA：柵、SB：竪穴住居・掘立柱建物、SD：溝、SE：井戸、SK：土坑、

SU：土器集積、SZ：方形周溝墓の墳丘部分、NR：自然流路・旧河道

10. 本書で使用する遺構埋土等の色調については 1989 年度版『新版標準土色帳』小山正忠・竹原秀雄編著を参考に記述した。

11. 調査区の座標は、国土交通省告示の国土座標第 VII 系に準拠する。

12. 調査の実測図・写真等の記録は財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターで保管している。

〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須新田町字野方 802 番 24

13. 調査による出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須新田町字野方 802 番 24

朝日遺跡の新知見

名古屋高速道路 16 号一宮線
下に国道 22 号線

東名阪自動車道
下に国道 302 号線

清洲 J.C.

現在の朝日遺跡（清洲 J.C. 付近南より）

この巻頭カラー図版には
今回の発掘調査と整理調査による
主な新しい成果を図と写真、
イラストを用いて表現したよ。

本報告は名古屋
高速道路 16 号一宮線
建設に伴う道路の橋脚
部分を中心に発掘調査
したものなんだよ。

朝日遺跡は東海地
方を代表する弥生
時代の環濠集落さ。

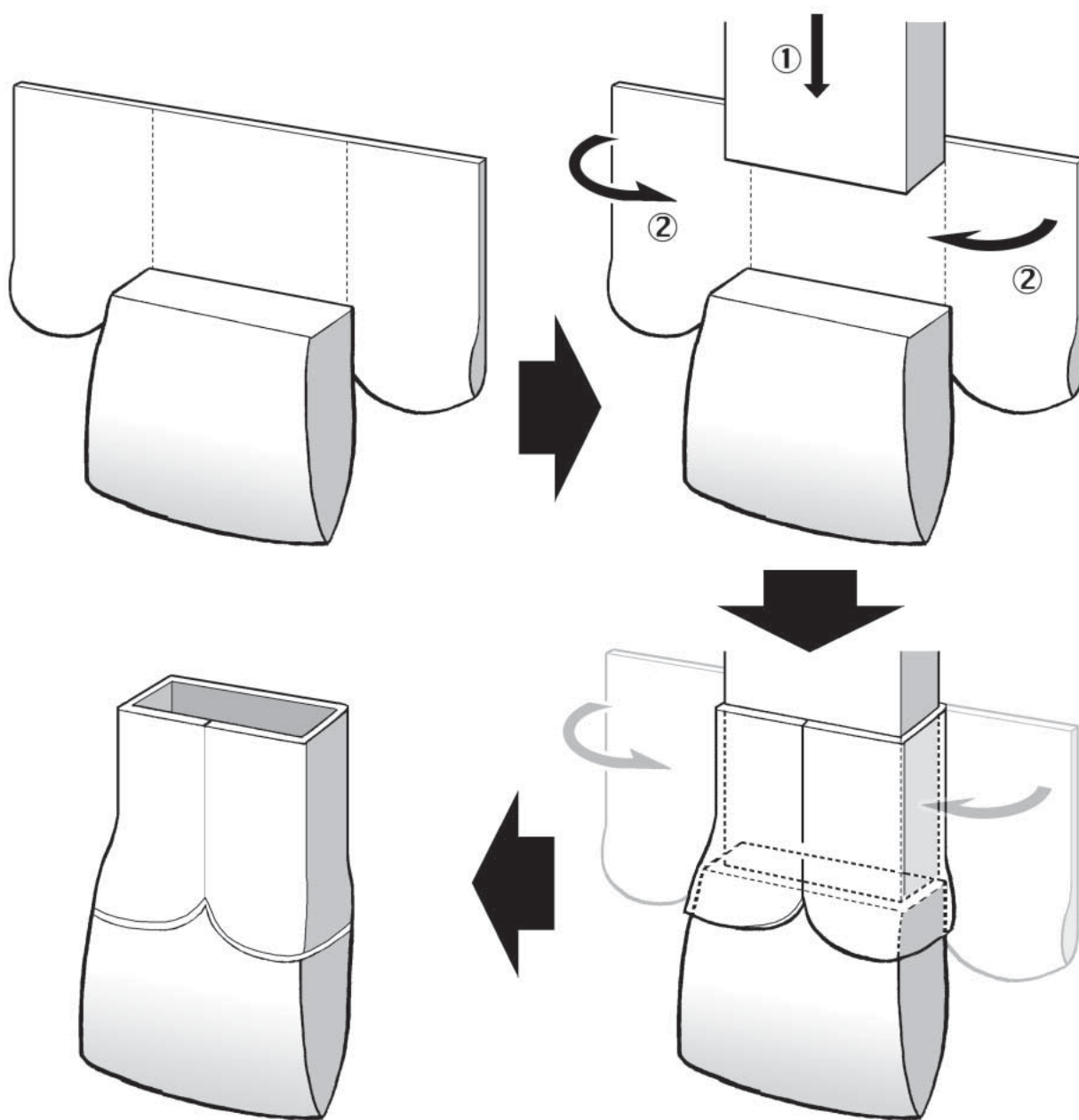


渡来した鉄斧

朝日遺跡で出土
した有肩袋状鉄斧
は下の絵のよう
に作ったんだ！



02Bb 区出土の有肩袋状鉄斧



朝日遺跡出土有肩袋状鉄斧の作り方（復元想像図）



↑ 有肩袋状鉄斧

有肩袋状鉄斧は木を切り倒す伐採斧というよりは、木の加工用の斧なんだ。



刃減りしたところ



朝日遺跡で出土した鉄斧は作り方から朝鮮半島にて作られたと考えられるんだ！



不思議な文物、巴形銅器



02Dd 区出土巴形銅器（上面）



02Dd 区出土巴形銅器（下面）
下面にはベンガラが付着していた。

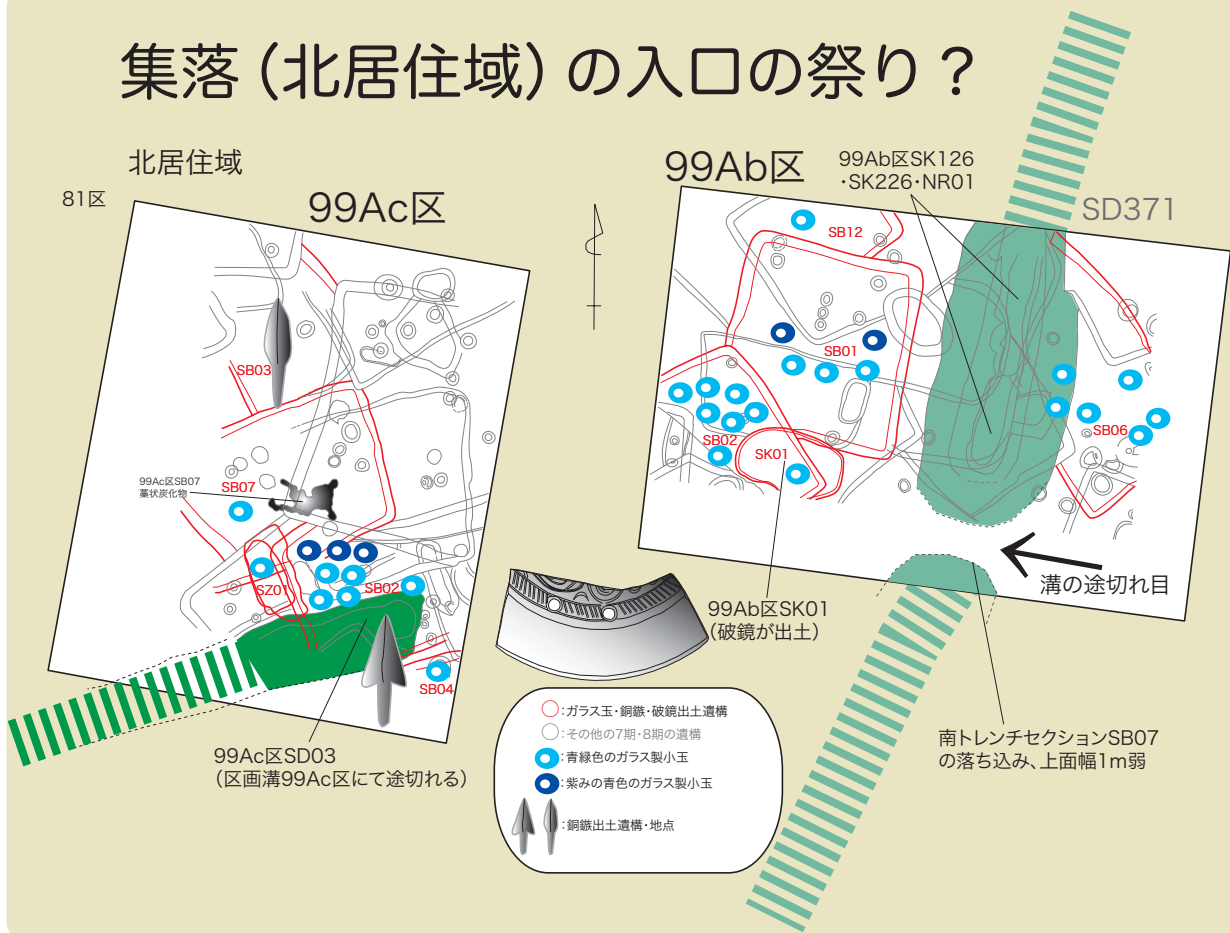


巴形銅器の分布



朝日遺跡出土の
巴形銅器は、北部九州地域
を中心に出土しているものと、
古墳時代前期の古墳から
出土するものと中間的形態
(翼の数や下面の留め金) を
しているんだ！

集落（北居住域）の入口の祭り？



99Ab 区・99Ac 区のキ龍文鏡・銅鏃・ガラス小玉の出土状況

弥生時代後期の朝日遺跡の北居住域の東入り口と考えられる場所で、キ龍文鏡（ペンダント）とガラス小玉（首飾り等）、銅製の矢じりが集まって出土したよ。



99Ab 区出土キ龍文鏡



99Ab 区と 99Ac 区で出土したガラス小玉

石器の製作工房となった 円形の大型竪穴住居



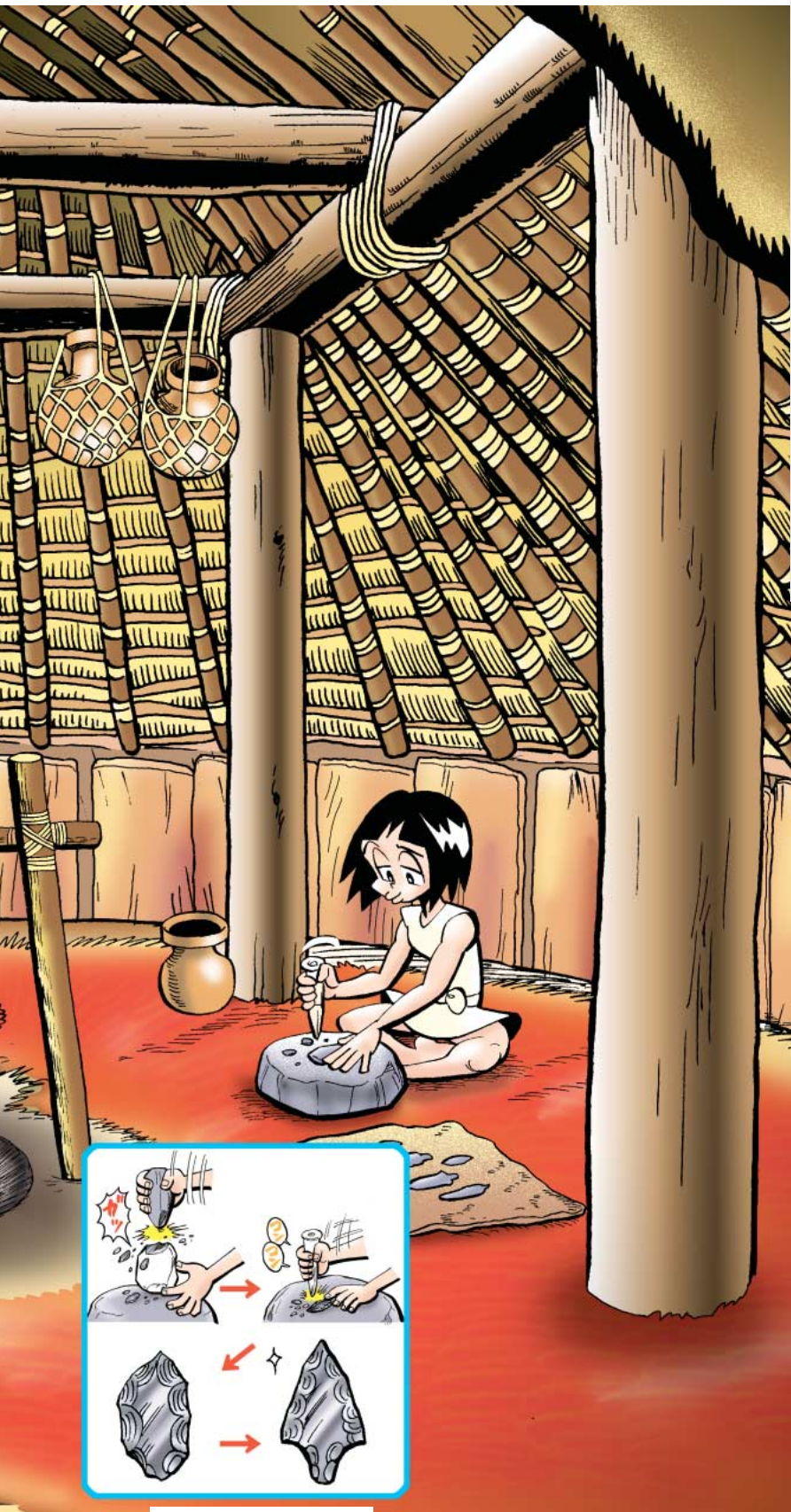
↑チャート製品の製作工程を示す資料
上から下の製品へと製作の流れを示す。

↓下呂石製品の製作工程を示す資料
上から下の製品へと製作の流れを示す。



勾玉の作り方

99Aa 区にて調査した円形の竪穴住居 SB26 をもとに
想像復元図を描きました。住居の建て替えに伴う床を
張り替えた間層として、ベンガラ層が床一面に見つかりました。



打製石鏃の作り方



↑ヒスイ製の勾玉（左側）と緑色凝灰岩製の管玉の製作工程を示す資料（右側）。下から上の製品へと製作の流れを示す。

↓サヌカイト製品の製作工程を示す資料

上から下の製品へと製作の流れを示す。



朝日遺跡の景観

- : 平面円形小型竪穴住居
- : 平面円形中型竪穴住居
- : 平面円形大型竪穴住居
- : 平面方形小型竪穴住居
- : 平面方形中型竪穴住居
- : 平面方形大型竪穴住居
- H : 掘立柱建物
- K : 大型土坑
- (黒色) : 弥生時代中期前葉
- (濃い灰色) : 弥生時代中期中葉前半
- (薄い灰色) : 弥生時代中期中葉と時期不明の円形住居
- : 遺構掘削面の等高線 (-0.9m~-0.6m、-0.4m~-0.1m、0.1m~0.4m、0.6m~0.9m、1.1m~1.4m、1.6m~1.7m)
- : 遺構掘削面の等高線 (-0.5m~0m~0.5m~1.0m~1.5m)
- : 遺構掘削面の等高線 (1.8m)
- : 遺構掘削面の等高線 (1.9m)
- : 遺構掘削面の等高線 (2.0m)
- : 遺構掘削面の等高線 (2.1m~)
- : 調査区

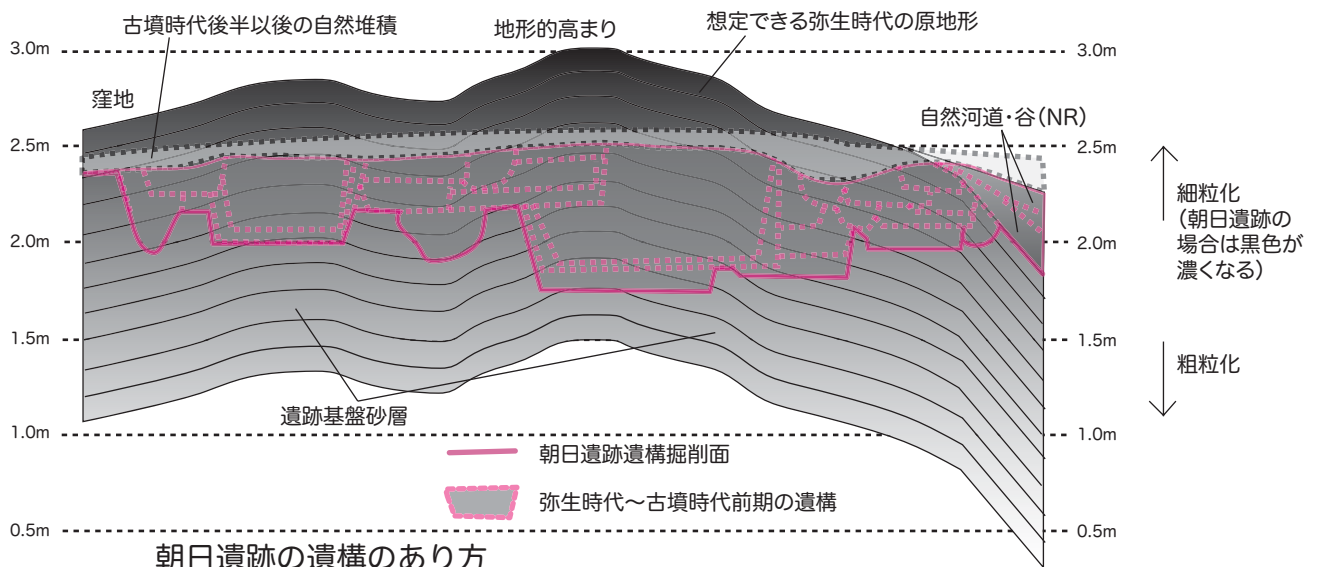
● : 推定される地形的高まり

● : 推定される帯状窪地

● : 谷Aからの窪地

朝日遺跡の
南居住域 (発掘調査後)
の標高 1.80m より低い
部分の付近に
大きな竪穴住居が
あるよ。





朝日遺跡の遺構のあり方

(遺跡基盤層の堆積は発掘調査において確認できる見せかけ傾斜角、弥生時代の地形復元はその見せかけの傾斜角から想定できるもの)



谷 A 出土の装身具

弥生時代中期前葉の 99Bb 区 NR01

弥生時代中期前葉の
旧河道谷 A から棒状鹿角製品
や鹿角製銚、イノシシの牙製
飾り、管玉などが一ヶ所
から出土したんだよ。

シカの
角製銚

緑色の管玉

イノシシの
牙製首飾り

シカの角製
棒状鹿角製品

← 棒状鹿角製品

← 鹿角製銚

→ 猪牙製飾り

← 猪牙製飾り

朝日遺跡の木材利用



木製品を作るには大きな木材（大径木）が必要なんだ！

上流

丘陵部（山）からヒノキ・スギ・モミ・ツガ等を切り出す。

ヤブツバキ

段丘の上の遺跡

製材・加工

クヌギ

コナラ

草本

クロマツ

製品作り

朝日遺跡（沖積低地の遺跡）

下流

ヤナギ

アシ・ヨシ

アシ・ヨシ

海

モミ

ヒノキ

アカガシ垂属

ケヤキ

シイノキ

コウヤマキ

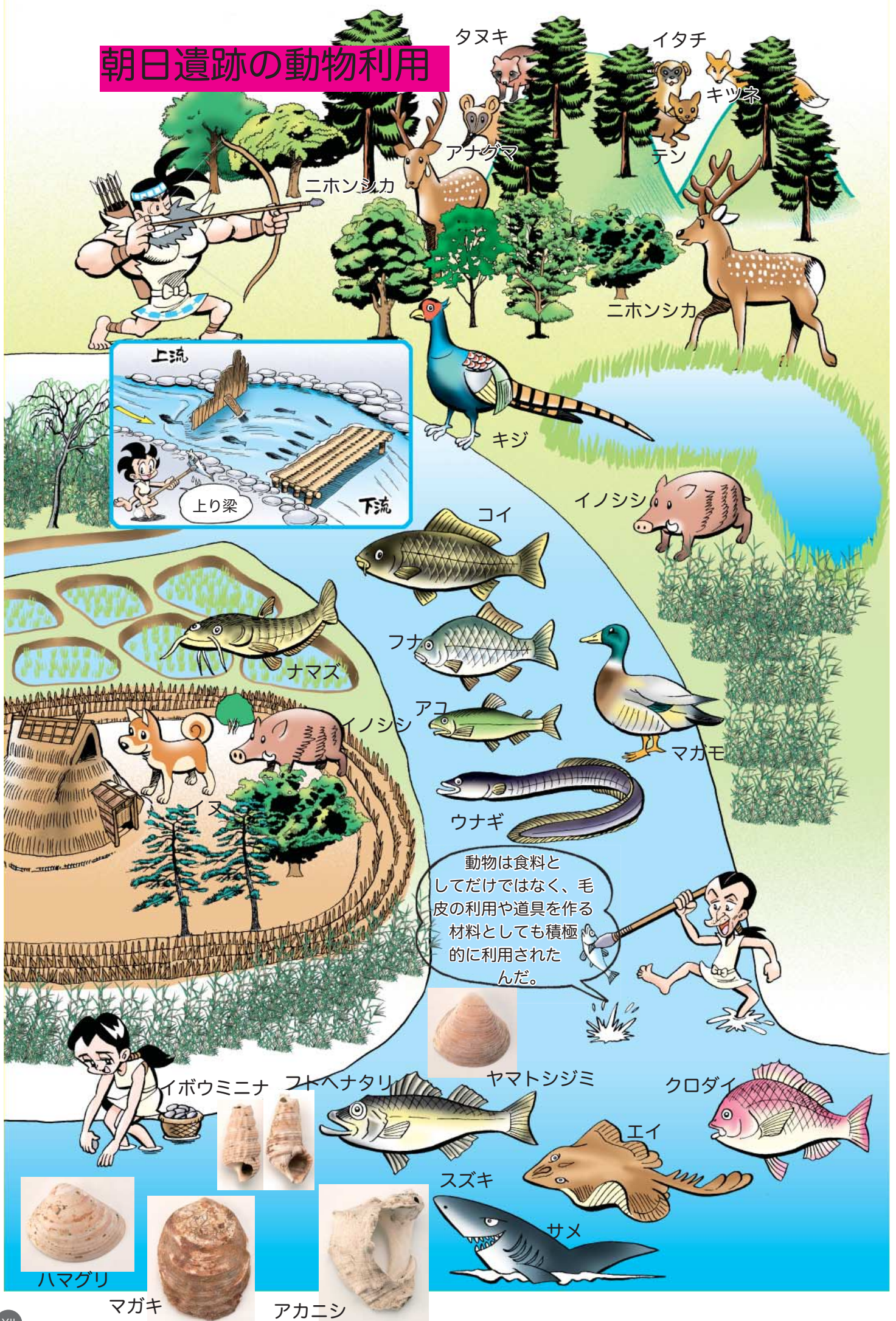
ツガ

サカキ

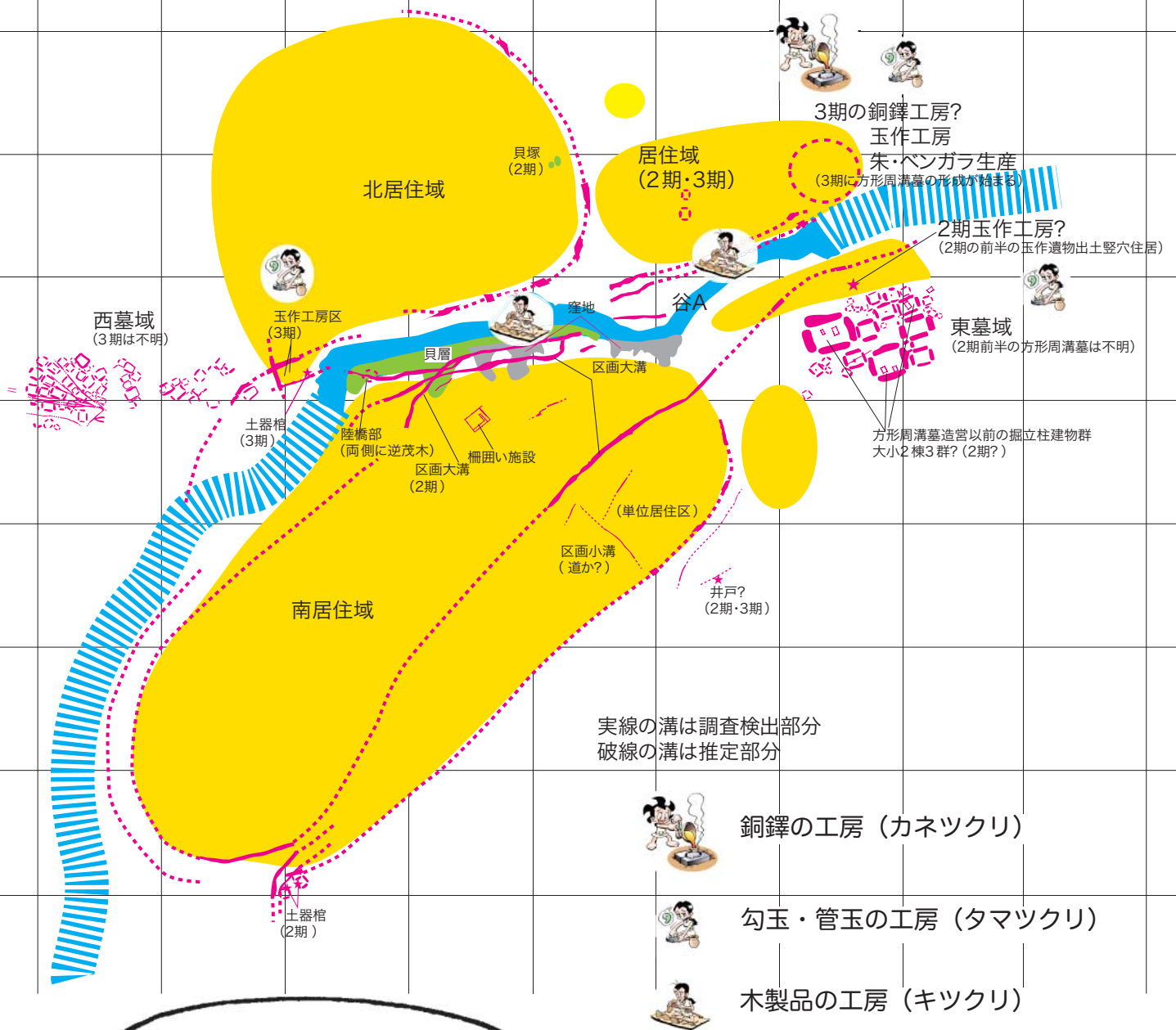
クスノキ

途中の遺跡で製材されたものを朝日遺跡に運ぶんだ。

朝日遺跡の動物利用



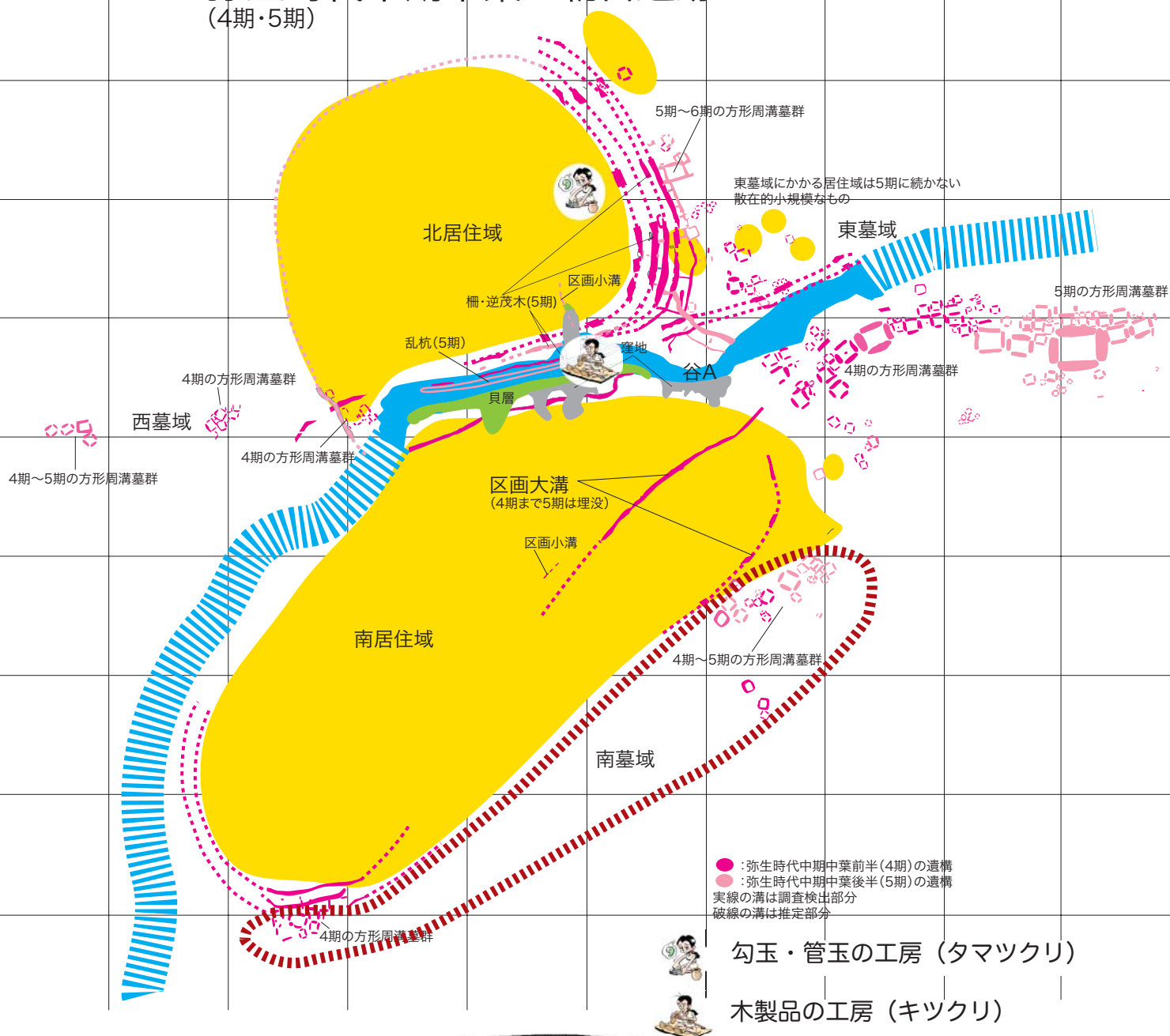
弥生時代中期前葉の朝日遺跡 (2期・3期)



弥生時代中期前葉の朝日遺跡は最も集落となる居住域が広がる時期なんだ。東墓域には王墓の可能性のある大型方形周溝墓が築かれ、銅鐸の製作（カネツクリ）や勾玉・管玉の製作（タマツクリ）、木製品の製作（キツクリ）などのモノツクリも盛んであったんだよ。

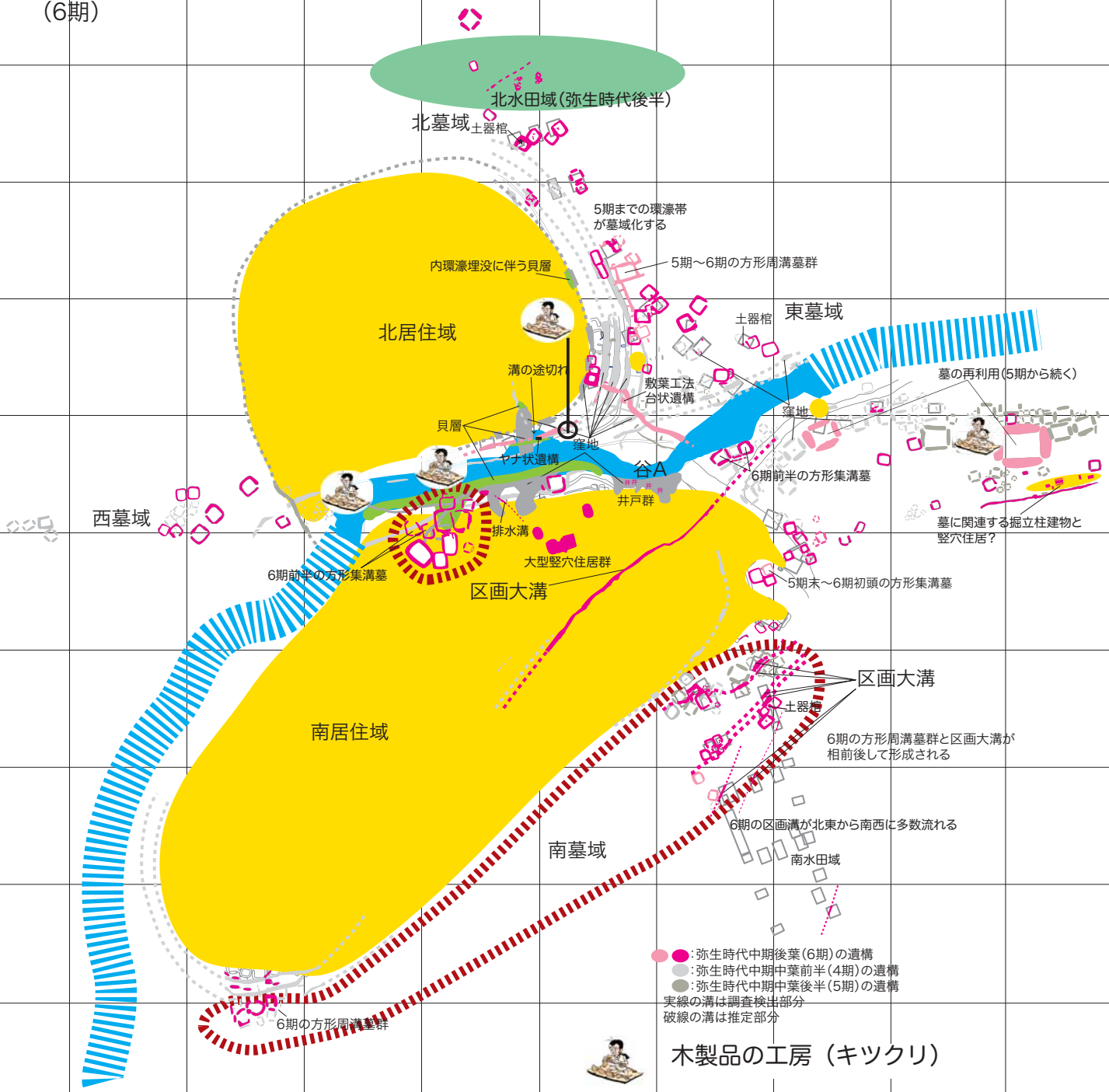


弥生時代中期中葉の朝日遺跡 (4期・5期)



弥生時代中期中葉の朝日遺跡は
北居住域に3重～4重の環濠が掘られるのが
大きな特徴だ。最も外側の環濠には「逆茂木」と
読んでいる柵状施設が造られるんだ。
また北居住域の南側の谷Aには河岸に沿って乱
杭も設けられていたんだ。つまり、防御集落と
しての姿が想像されるんだ。

弥生時代中期後葉の朝日遺跡 (6期)



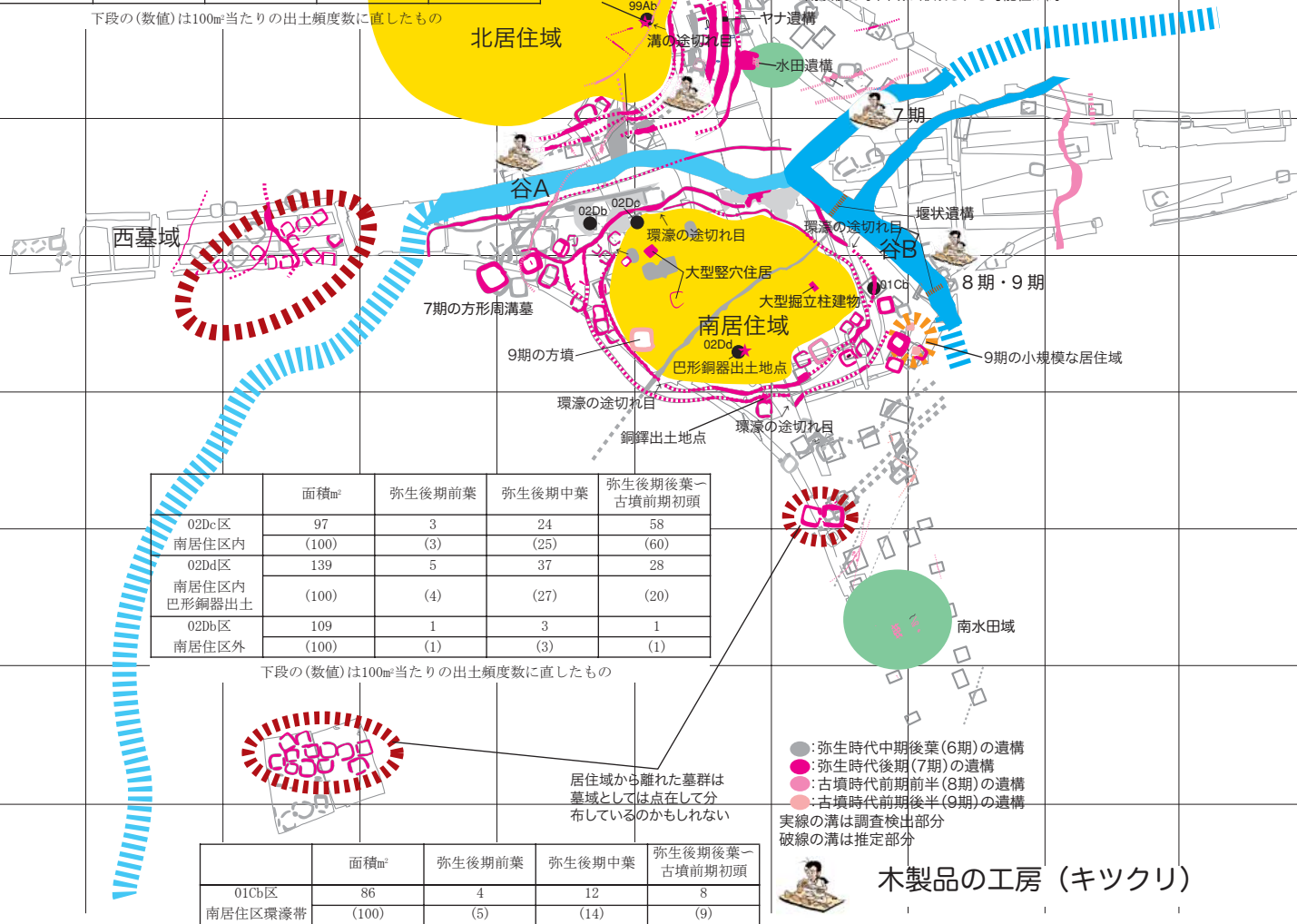
弥生時代中期後葉の朝日遺跡には
集落を廻る環濠は埋まってなくなり、
南居住域の北東部に大型竪穴住居からなる
中心部分ができるんだ。今回の調査成果は、
集落の北側と南側に北東から南西にかけての
区画溝が掘られ、水田が形成されて
いたことが推定できるようになっ
てきたことだよ。



弥生時代後期～古墳時代前期の朝日遺跡
(7期～8期、9期は一部)

	面積㎡	弥生後期前葉	弥生後期中葉	弥生後期後葉～ 古墳前期初頭
02Ac区	174	2	8	4
北居住区環濠帯	(100)	(1)	(5)	(2)
99Aa区	72	12	32	24
北居住区内	(100)	(17)	(44)	(32)
99Ab区	83	17	45	42
北居住区内 キ龍鏡出土	(100)	(20)	(54)	(51)
01Aa区	146	29	55	19
北居住区環濠帯 方形周溝墓群	(100)	(20)	(38)	(13)

下段の(数値)は100m²当たりの出土頻度数に直したもの



弥生時代後期から古墳時代前期初頭の朝日遺跡では再び環濠が掘削され、今回報告した巴形銅器や銅鏃などの青銅器や有肩袋状鉄斧の鉄器といった特徴のある遺物が出土したよ。

首飾りなどに使われた青色のガラス小玉もこの時期に見られる特徴的な遺物だよ。

図の中にある表は各調査地点の時期別の土器出土頻度を分析したものです。弥生時代後期～古墳時代前期初頭においては、集落の中でも時期的な変遷がみられ、環濠集落の外では墓以外の部分からはほとんど遺物が出土しません。



目 次

序	i
---	---

例言	ii
----	----

巻頭カラー図版（蔭山誠一編）

第1分冊 遺 構

第Ⅰ部 前 言	1
---------	---

1. 経緯	蔭山誠一	2
-------	------	---

2. 調査の方法と工程	蔭山誠一	4
-------------	------	---

3. 遺跡の概観	蔭山誠一	9
----------	------	---

第Ⅱ部 遺構の分析	13
-----------	----

1. 遺跡の層序	蔭山誠一	14
----------	------	----

2. 遺跡の調査成果	蔭山誠一	22
------------	------	----

3. 中世から近世の遺構	蔭山誠一	194
--------------	------	-----

第2分冊 出土遺物

第Ⅲ部 出土遺物の分析	1
-------------	---

1. 土製品	蔭山誠一	2
--------	------	---

2. 石製品	蔭山誠一・馬場伸一郎・原田 幹	81
--------	-----------------	----

3. 木製品	樋上 昇	168
--------	------	-----

4. 骨角製品	川添和暁・山崎 健	245
---------	-----------	-----

5. 動物遺存体	山崎 健・織田銃一	264
----------	-----------	-----

6. 金属製品	赤塚次郎	292
---------	------	-----

7. ガラス製品	蔭山誠一・堀木真美子	299
----------	------------	-----

第3分冊 総括

第Ⅳ部 総括	1
1. 尾張地域における石棒の行方	寺前直人 2
2. 朝日遺跡02Bd区出土袋状鉄斧と東アジアの鉄斧製作技術	村上恭道 11
3. 朝日遺跡における金属製品の分布とその特徴について	赤塚次郎 17
4. 朝日遺跡における動物資源利用	山崎 健・織田銑一 24
5. 朝日遺跡出土木製品の樹種組成と周辺の古植生	樋上 昇 35
6. 朝日遺跡出土の木材利用	岡田 賢 61
7. 朝日遺跡出土木材の樹種と木材利用	植田弥生 73
8. 朝日遺跡から出土した大型植物化石	新山雅広 88
9. 弥生中期～古墳前期の土器胎土の材料分析	藤根 久 127
10. 朝日遺跡(2001年度・2002年度出土) における土器胎土の岩石学的分析	永草康二 143
11. 朝日遺跡における水田遺構と北居住域内遺構の植物珪酸体	鈴木 茂 146
12. 朝日遺跡における堆積および地形環境	鬼頭 剛 154
13. 朝日遺跡における2つの住居形態	蔭山誠一 172
14. 朝日遺跡の景観論	蔭山誠一 192
ま と め	蔭山誠一 219

添付DVD掲載図版

第Ⅴ部 遺構図版

1. 各調査区の遺構(1AS98Ca1～1AS03Da3)
2. 竪穴住居集成(SBPL01～SBPL30)
3. 土坑集成(SKPL01～SKPL27)
4. 中世・近世の遺構(1AS99Bbm～1AS03Cam)

第Ⅵ部 出土遺物図版

1. 土製品(EPL001～EPL177)
2. 石製品(SPL001～SPL096)
3. 木製品(WPL001～WPL086)
4. 骨角製品(BPL001～BPL009)
5. 金属製品(MPL001～MPL002)
6. ガラス製品(XAPL1)

第I部

前言

Asahi ruins



1 経緯

蔭山 誠一

2 調査の方法と工程

蔭山 誠一

3 遺跡の概観

蔭山 誠一



I 1 経緯

朝日遺跡は、愛知県清須市、西春日井郡春日町、名古屋市西区にまたがる境界部分に位置する遺跡で(図1-1-1)、現在の東名阪自動車道・国道302号線と国道22号線の交差する地点とその周辺に広がる遺跡で、その総面積は約100haに及ぶ。今回の発掘調査は、名岐道路建設の事前調査として平成10年度より日本高速道路公団・名古屋高速道路公社より愛知県教育委員会を通して委託されて、平成10年度と平成11年度については財団法人愛知県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施し、平成13年度から平成15年度については財団法人愛知県埋蔵文化財センターの業務を引き継いだ財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。

6カ年度にわたる今回の発掘調査は、調査区がこれまでの広範囲にわたる面的調査とは異なり、建設する道路橋脚部分、道路への上・下降経路建設部分、道路建設に関連する用水路部分を中心とする調査区となり、50m²~400m²程の方形から長方形、及び幅2m程の細長いトレンチの形態となった。調査区は87ヶ所にわたり、調査面積は10,920m²である(図1-1-2)。今回の調査では1面のみの調査で終了する箇所は少なく、多面にわたる調査を実施しており、平均すると各調査区3面の調査を行っている。



図1-1-1 朝日遺跡の位置

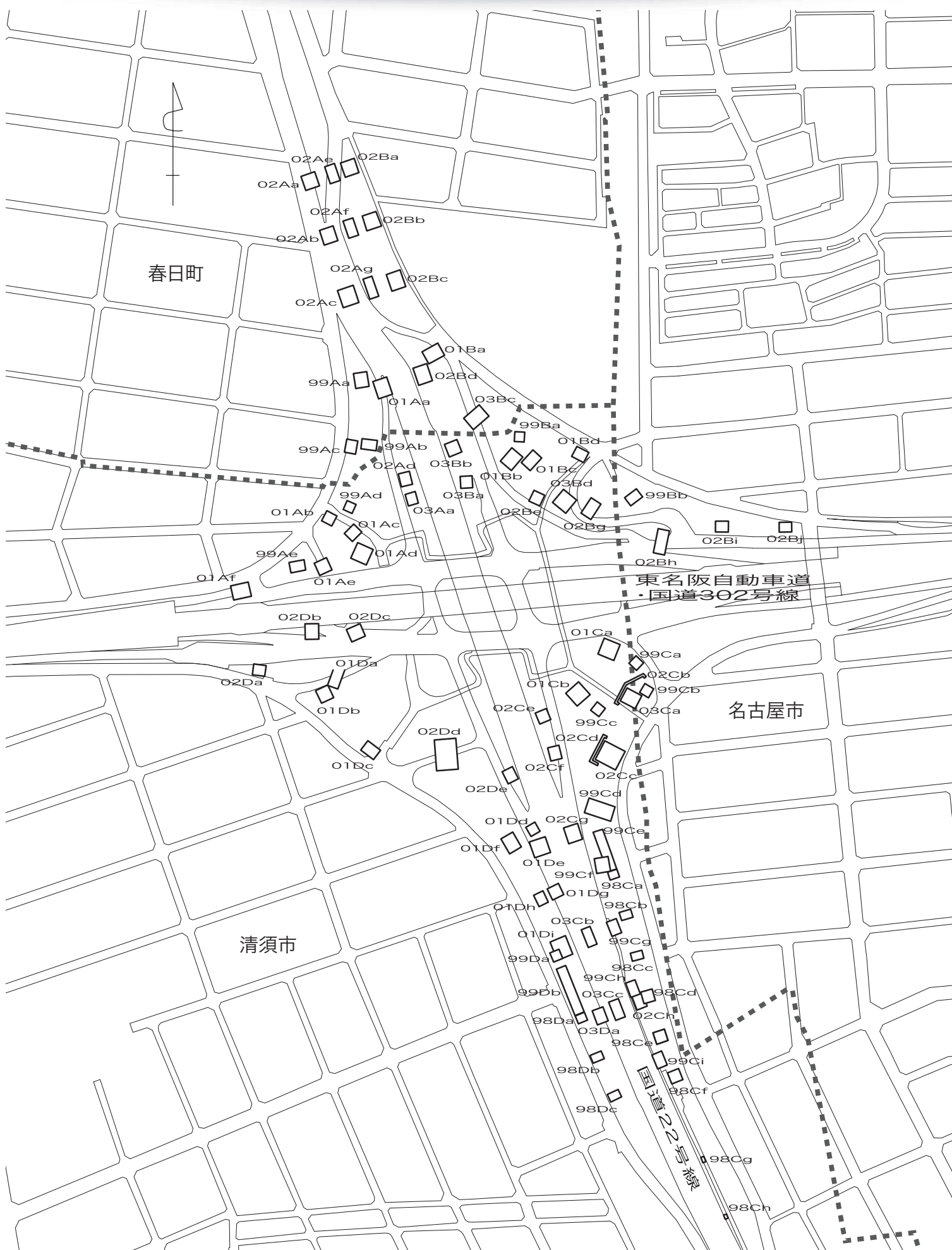


図1-1-2 調査区の位置 (1:3,000)



I 2

調査の方法と工程

朝日遺跡は沖積地に立地し、地下水位が高い地域にあるため、これまでの発掘調査においても地中からの湧水が調査を円滑に進める重要課題であった。昭和60年度以後の発掘調査において強制排水（ウエル・ポイント）による工法が採用され、遺構の細かい調査、谷部の調査が初めて可能になった。今回の調査では、先に述べたように調査区が狭く、道路建設により地中深く掘削される矢板に囲まれた範囲のみを調査するため、強制排水は行わなかったが、調査の安全確保のため、平成13年度についてはさらに湧水を止めるために矢板に樹脂による止水を行い、湧水に対処した。他に調査中の雨水と湧水の処理は、ポンプによる汲み上げ排水を行った。

また調査区が矢板に囲まれた内部の調査となるため、調査員等の移動、発掘調査に使用する機材搬入のための足場を確保するため、矢板に接した部分を主に通路として確保した。

調査区の名称については、道路の橋脚部分のみの調査が主体となり、80ヶ所近い調査区が設定された。従来の本センターの調査区表記法である調査年度とアルファベットを組み合わせた表記法では、調査区数が上回り対応することができない可能性が考えられたため、今後の朝日遺跡の調査に限定して、以下の通り、調査区の表記を行うこととする（表1-2-1）。

- ①大調査区の設定…遺跡のほぼ中央を東西・南北に走る国道22号線・東名阪自動車道のセンターラインを利用し、大きくA～Dの4つの大調査区を設定する。
- ②小調査区の設定…この調査区が具体的な調査区となる。この小調査区はA～Dの大調査区の中

中で、調査した順番にアルファベットの小文字をふる。

- ③調査区の表記法…この大調査区と小調査区に従来の年度表記を組み合わせた形で調査区の表記を行う。（例：IAS<遺跡記号>98<年度>A<大調査区>a<小調査区>）
- ④道路センターライン上に設置される調査区については、アルファベットの早い大調査区に含める。

調査区は（表1-2-1）のように多くの地区に分かれるが、これまでの調査により遺物包含層の深度、層厚、及び検出される遺構の状況はおおよそ予想できた。しかし同じ遺跡であっても、近年における国道等建設に伴う盛土などにより、発掘調査を開始する遺物包含層に達するまでの深度が大きく異なった。そのため、平成10年度と平成11年度は全ての調査区において矢板を支える張り（支柱）が井桁状に組まれたが、発掘調査にともなう作業をする上で支障を来す場合が多くあったため、平成12年度からは安全が確保できる調査区については、張り（支柱）を付けない方針をとった。このため国道脇に調査区が隣接するために、遺構の深度によっては安全確保のため掘削できない場面もあった。また発掘調査を開始した平成10年度は道路建設に伴う工事は始まっていなかったが、平成11年度以降は道路建設が順次始まり、発掘調査に伴う作業ヤード（バックホーの行動範囲、排土置き場、発掘作業にともなう休憩所、トイレ）の確保、道路工事との工程調整が、調査区により異なった。

掘削は包含層直上までバックホー等の機械力によって行い、遺物包含層以下を人力で行うこと

表1-2-1 調査の工程

調査区／月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
98Ca区											■■■■■■■■■■	■■■■
98Cb区											■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■
98Cc区											■■■■■■■■■■	■■■■
98Cd区									■■■■■■■■■■	■■■■		
98Ce区									■■■■■■■■■■	■■■■		
98Cf区									■■■■■■■■■■	■■■■		
98Cg区											■■■■■■■■■■	■■■■
98Ch区										■		
98Da区										■		
98Db区										■■■■■■■■■■	■■■■	
98Dc区										■■■■■■■■■■	■■■■	
99Aa区										■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■	
99Ab区											■■■■■■■■■■	■■■■
99Ac区										■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■	
99Ad区										■■■■■■■■■■	■■■■	
99Ae区												■■■■
99Ba区									■■■■■			
99Bb区									■■■■■			
99Ca区												■■■■
99Cb区												■■■■
99Cc区												■■■■■■■■■■
99Cd区												■■■■
99Ce区									■■■■■			
99Cf区											■■■	
99Cg区								■■				
99Ch区								■				
99Ci区								■■				
99Da区											■	
99Db区									■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■	■■■■	
01Aa区												■■■■
01Ab区												■■■■■■■■■■
01Ac区											■■■■■	
01Ad区										■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■
01Ae区	■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■										
01Af区												■
01Ba区	■■■■■■■■											
01Bb区										■■■■■		
01Bc区									■■■■■■■■■■	■■■		
01Bd区											■■■■■■■■■■	■■■■
01Ca区										■■■■■■■■■■	■■■	
01Cb区											■■■■■■■■■■	■■■■
01Da区								■■■■■	■■■■■■■■■■	■■■		
01Db区								■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■			
01Dc区								■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■	■■■■	
01Dd区										■■■■■		
01De区									■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■		
01Df区								■■■■■■■■■■	■■■■■			
01Dg区									■■■■■			
01Dh区								■■■■■				
01Di区								■■■■■■■■■■				
02Aa区		■■■■■■■■										
02Ab区		■■■■■■■■■■										
02Ac区	■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■										
02Ad区										■■■■■■■■■■	■■■	
02Ae区												■■■■
02Af区									■■■■■■■■			
02Ag区									■■■■■■■■			
02Ba区										■■■■■■■■	■■■■■■■■	
02Bb区											■■■■■■■■	■■■
02Bc区										■■■■■■■■	■■■■■■■■	
02Bd区												
02Be区			■■■■■									
02Bg区				■■■■■■■■■■								
02Bh区				■■■■■								
02Bi区			■■■■■■■■									
02Bj区			■■■■■									
02Cb区							■■■■■					
02Cc区					■■■■■			■■■■■■■■■■				
02Cd区												
02Ce区									■			
02Cf区									■■■■■■■■■■	■■■■■■■■		
02Cg区									■■■			
02Ch区						■■■■■						
02Da区					■■■■■■■■							
02Db区									■■■■■■■■■■	■■■■■■■■■■	■■■■	
02Dc区								■■■■■■■■■■				
02Dd区					■■■■■■■■■■							
02De区								■■■■■■■■				
03Aa区	■■■■■											
03Ba区		■■■■■■■■■■										
03Bb区	■■■■■											
03Bc区			■■■■■■■■									
03Bd区	■■■■■■■■											
03Ca区			■■■■■■■■									
03Cb区					■■■							
03Cc区					■■■■■							
03Da区												■■■■



を基本とした。しかし、旧河道部分については、99Ba区や01Ad区等のように堆積層の状況を注意深く観察しながら機械力を使用した場合や、その反対に99Ab区や99Ac区等のように破碎鏡や銅鏝、ガラス玉が出土した地点については、移植ゴテで掘り下げを行い、遺物の出土した遺構の排土を全て土嚢に入れて持ち出し、水洗による土壌のフローテーションを実施するというように、適宜方法を変えた。

遺物包含層の掘削は、遺物包含層上面及びその中位において遺構検出を実施するために、堆積層の層位や任意の高さによって「検出」として掘り下げを実施することを基本とした。そのために従来とは異なる方法で遺物取り上げを行った。弥生時代～古墳時代前期を中心とする遺物包含層（黒色土）の掘削を「検出II」とし、それより堆積時期が新しく上層の遺物包含層を含む堆積の掘削を「検出I」、それより堆積時期が古く下層の堆積層の掘削を「検出III」とした。また、平成13年度からは弥生時代～古墳時代前期の遺物包含層の中で多面にわたる遺構検出を実施することが通例となり、遺物包含層上面の調査が終了し、次の遺構検出を行うために掘削を行う場合を「検出II-1」として遺物を取り上げ、以下の遺構検出に伴う掘削については「検出II-2」、「検出II-3」、「検出II-4」・・・というように順次区別して行った。完全ではないが、ある程度の範囲において古い時代の堆積層と新しい時代の堆積層を区別して表現しようとする試みである。

遺構の詳細に関わるプラン・セクション、遺物

の出土状態図などの実測・写真撮影は調査に並行して作成したが、基本はデジタル平板によるプランの実測、デジタルカメラとデジタル平板を併用したセクションの実測、6×7判カラーポジフィルムによる写真撮影、300万画素以上のデジタルカメラ写真撮影を実施した。しかし、01Ad区のSX01にともなう植物遺体の出土状況については現場における詳細な手ばかりの実測を行い、その後遺構の部分を切り取り、整理事務所において詳細に構造を観察、実測する場合や01Ad区や02Bc区のようにデジタル3D測量を実施する場合、広範囲にわたる調査の測量に多い空中写真撮影による測量を実施する場合等、適宜方法を変えた。遺構等の土壌の堆積物の色調の表現については土色帳を使用し、堆積物の粒度については以下の基準によって行った。

粘土：砂粒が目視できず、紐になり曲げることができる。

シルト：砂粒が目視できず、紐になるもの、曲げることとはできない。

細粒砂：砂粒が目視できず、紐にならないもの。

中粒砂：砂粒が目視できず、紐にならないもの、手触りで砂粒が認識できるもの。

粗粒砂：砂粒が目視でき、紐にならないもの、手触りで砂粒が認識できるもの。

混入物：貝殻・腐植物・焼土・灰・炭化物・赤色顔料等、堆積物の特徴のある場合に記録する。または単一から混ざった堆積層をなす場合も記録する。

各調査区の工程は表1-2-1に示した通りである。



写真1-2-1 表土掘削



写真1-2-2 遺構掘削



写真1-2-3 遺構掘削



写真1-2-4 写真撮影の準備



写真1-2-5 遺物の検出



写真1-2-6 高所作業車による写真撮影



写真1-2-7 遺構の平面測量



写真1-2-8 遺構の堆積層の観察



写真1-2-9 遺構図面の整理



写真1-2-10 出土遺物の分類



写真1-2-11 遺物の分類と接合



写真1-2-12 遺物の接合と復元



写真1-2-13 遺物の実測



写真1-2-14 出土遺物の検討会



写真1-2-15 遺物の計測と観察



写真1-2-16 遺物の写真撮影

I 3

遺跡の概観

(1) 地理学および地質学的接近(図1-3-1)

朝日遺跡をとりまく地理的環境や濃尾平野における朝日遺跡の占める位置および遺跡基盤層の成立過程等について、これまでの調査・研究成果と疑問点をふまえて略記する。

A. 位置と地形……………

朝日遺跡は半径約12kmの犬山扇状地扇端部より南方へほぼ7km、木曽川水系五条川の氾濫原地帯に立地しており、河川堆積が主体となった時代の遺跡である。遺跡の一部は清洲貝殻山貝塚の国史跡指定により弥生時代前期から始まる遺跡として比較的早くから知られ、その他貝塚地点の調査等から付近に弥生時代の遺跡が点在する地域として周知であった。その後昭和47年からの大規模な発掘調査により、点在する遺跡が一つの大きなまとまりをもつ遺跡群として認識されるに至り、「朝日遺跡」として東海地方屈指の弥生時代の集落遺跡として周知されるようになった。

朝日遺跡の東南東約4kmには、庄内川を挟んで西志賀遺跡(名古屋市区)、遺跡の南西部一帯2km以内には阿弥陀寺遺跡(海部郡甚目寺町)、廻間遺跡(清洲市)、土田遺跡(清洲市・稲沢市)、大渕遺跡(海部郡甚目寺町)、森南遺跡(海部郡甚目寺町)、北西北約5kmには大塚遺跡(稲沢市)などが展開し、この付近一帯は弥生時代の遺跡が密集する地域である。

B. 朝日遺跡の「黒色土」……………

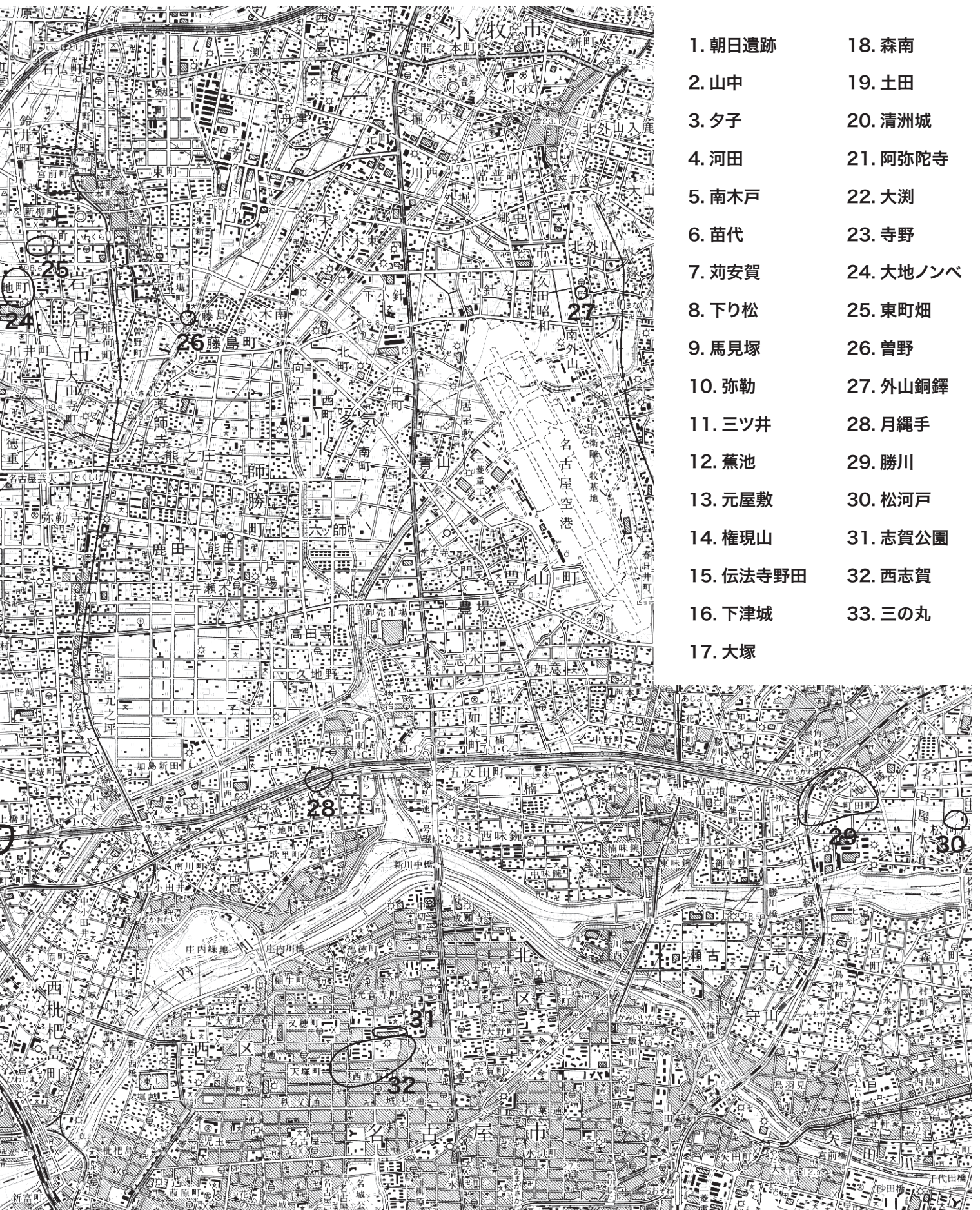
朝日遺跡の発掘調査現場に初めて立つ者は、弥生時代の遺物包含層である「黒色土」の厚い堆積にその黒さとともに圧倒される。その要因の一つ

である厚い堆積は、これまでの調査においてそれは弥生時代の人々が築いた遺構群であることが明らかにされており、尾張地域他遺跡においてみられるごく一部の層厚が薄い黒色土とは明らかに異質な印象を受けることが挙げられる。もう一つの要因である堆積土の黒さは、地質学や土壌学などにおいて考えられているような「黒色土」の形成と大きくは関係するものと思われるが、調査現場に立つ考古学者は発掘調査で異なった体験をする。初めて朝日遺跡の調査現場を見る者や調査員が発掘調査に入った直後にみる強烈な黒さは、調査に入りしばらくするとこの「黒色土」には濃淡があることがわかるようになる。さらに発掘調査終了間際になると、この「黒色土」が何故か灰色にしか見えなくなる慣れ(ある種の錯覚と思われる)が起こり、全ての遺構を掘り終わった後に残る遺跡の基盤層上にのる「黒色土」は遺構の堆積土である「黒色土」よりは明らかに淡い黒色に見える。調査最後に見られるこの淡い「黒色土」はこれまでの調査成果によれば、朝日遺跡形成以前に堆積した縄文時代以前に形成されたものである。そして調査員の一部は朝日遺跡の「黒色土」の黒さ(黒み)は弥生時代の人々の汗と涙と血、そしていわゆる「うんこ」の結晶であると考えられるに至る体験をする。いずれにせよ、朝日遺跡の「黒色土」は遺跡の特質を考える上で大きな課題として存在する。

C. 朝日遺跡の「貝層」……………

これも従来の調査以来、大きな課題とされてきたものであるが、他の弥生時代の遺跡の中では稀といえる貝層が多くみられることである。また他





- | | |
|-----------|-----------|
| 1. 朝日遺跡 | 18. 森南 |
| 2. 山中 | 19. 土田 |
| 3. 夕子 | 20. 清洲城 |
| 4. 河田 | 21. 阿弥陀寺 |
| 5. 南木戸 | 22. 大渕 |
| 6. 苗代 | 23. 寺野 |
| 7. 苅安賀 | 24. 大地ノンベ |
| 8. 下り松 | 25. 東町畑 |
| 9. 馬見塚 | 26. 曾野 |
| 10. 弥勒 | 27. 外山銅鐸 |
| 11. ツ井 | 28. 月縄手 |
| 12. 蕉池 | 29. 勝川 |
| 13. 元屋敷 | 30. 松河戸 |
| 14. 権現山 | 31. 志賀公園 |
| 15. 伝法寺野田 | 32. 西志賀 |
| 16. 下津城 | 33. 三の丸 |
| 17. 大塚 | |



の遺構の中にも貝殻等がとけたような白っぽい堆積物や貝層の腐食した黄色みのある堆積物が随所に見られる。貝層の構成物はハマグリ・マガキを主体とした内湾砂泥底に生息する貝類であり、これまで朝日遺跡の立地が当時付近に海岸線が存在する想定がされる要因となった。しかしこれまでのその他の魚骨類からの分析成果からは、朝日遺跡の漁労活動は明らかに河川周辺や池沼に生息する魚類を主体に捕獲しており、内湾性および外洋性魚類の捕獲は一部に留まる。尾張地域南西部には中世以降、現在も貝層を形成し続けている町が多くあり、遺跡に残る貝層の形成はその形態や貝層を形成する構成種の問題と併せ考古学にとって新たな課題として挙げられるものである。

D. 埋積浅谷と砂堆地形 ……………

これまでの調査により朝日遺跡の中央を東西に流れ、遺跡の北東方面から南西方面に流れ出る旧河道Aを発見した。発掘調査により確認された旧河道Aは、旧河道脇において検出された縄文時代後期のドングリ土坑の痕跡を確認したことにより、縄文時代後期には流れていた可能性が高くなり、弥生時代を通じて流れていたようである。弥生時代後期頃から埋没が進み、中世以後には湿地として残り、中世末頃から窪地を利用して水田化されたことが今回の発掘調査により確認された。この旧河道Aの跡は明治以降になっても水田として付近に流れをたどることができるものであった。

一方で、朝日遺跡の地点においてこの旧河道が大きく南南西から西に屈曲する理由の一つとして、以前より基盤砂層の高まりとしての砂堆地形の存在が指摘されている。これはこの地域を流化する木曽川水系五条川の自然堤防の延長方向とは異なる直交から斜交方向に延びるようであり、朝日遺跡の立地が単に発見された旧河道の形成した自然堤防上に立地しているものではないことが明らかにされている。この砂堆地形の形成については、本報告の後の章について触れることとなる。

現在、濃尾平野における地形の形成と変遷、そ

れに関連した遺跡の展開、人間活動の進出についての分析・研究は、発掘調査をもとにした考古学的分析の進展と相まって、自然科学的分析にもとづいた地質学的研究を中心に前世紀の研究の検証を進め、新たなモデルを構築していく段階に差し掛かっているといえる。

(2) 歴史的接近

朝日遺跡における人間活動の痕跡は、先に述べたように、縄文時代後期に始まり、江戸時代まで認められ、弥生時代前期から古墳時代前期を中心に盛んな営みが存在した遺跡であることは周知の成果である。また、朝日遺跡の西方にある清洲城下町遺跡は、弥生時代中期末葉の弥生土器片の出土が確認されており、古墳時代以後断続的に遺跡が展開し、城下町が築かれ、現在に至ることが明らかにされており、朝日遺跡の人間活動とは、明らかに正比例する動向をもつ。これはこれまでに指摘されるように、弥生時代中期から後期にかけて続いていた阿弥陀寺遺跡や森南遺跡などが古墳時代に入ると衰退し、かわって廻間遺跡や土田遺跡のように古墳時代を中心に遺跡が展開する現象と関係する部分もあると考えられる。

一方でこのような朝日遺跡の動向の要因は、遺跡の中に見られる旧河道Aの展開と大きく重なり、朝日遺跡の営みが盛んな弥生時代中期には旧河道Aが比較的安定した流れをもつ存在として、遺跡の中央を東西に流れていたものと思われる。弥生時代後期になると東西に流れる旧河道Aが埋没し、遺跡東側にて旧河道Aより分かれ、左に屈曲する旧河道Bが南東方向に流下する。その後も旧河道Aは小さな流れが存在するが、流れの中心は旧河道Bに移り、古墳時代前期後半頃には旧河道Bも埋没していく様子が確認できている。この旧河道の変遷と時を同じにするように遺跡から発見される遺構・遺物も変遷し、旧河道の埋没とあわせるように、遺構・遺物が少なくなる。弥生時代を中心とする集落を朝日遺跡とするなら、朝日遺跡は当時の人々がこの旧河道を通じて紡いだ営みの結晶ともいえる。